

国語教育思想史の検討

— メディアという視点から —

瀧口 美絵

広島都市学園大学 子ども教育学部

要 旨

子どもの理解と表現に影響を与える国語観は、どのように形成されていくのか。近世の教育論を例に挙げてみると、子どもの国語観を下支えしている価値観や考え方は、それぞれの職業、身分、階級、年齢など、子どもたちを取り巻くコミュニティや生活環境によって差異があると考えられる。では、子どもの人間形成・国語観の形成には、国語科という教科を越えた子どもの言語生活環境の差異とそのコミュニティにみられる教育がいかに関与しているのか。また、それぞれのコミュニティや生活環境が生み出す価値観や考え方は、いかにして国語観を形成しているのか。本稿では、近世の教育論を例に挙げ、生活コミュニティの違いにおける国語観の一端を明らかにし、現代の子どもの国語観に影響を与える思想がいかなるものかを検討し、描出してみたい。

キーワード：メディア、国語教育、教育思想、歴史、理解と表現

はじめに

筆者のこれまでの研究では、国語科教育におけるメディア教育分野の基盤づくりの一環として、史的研究からのアプローチを進めてきた。これは、国語科教育の系譜からメディア教育を導き出そうとおこなった史的検討である。

史的研究から明らかになってきたことは、国語科では、近代教育制度制定以降、掛図・映画・ラジオなどのメディア機器の利用にみられるように、古くから教材・教具の利用としてのメディア教育が浸透していたという系譜が確認できたことである。

そこで重要だったのは、国語科では、どこまでのメディアテキストを理解・表現の対象と捉えるか、メディアテキストをどのように読み・書きするか、この分野の本質的課題として、常に時代状況に則しながら独自の議論がなされてきている系譜が確認できた点である。この系譜は、前者の教材・教具の利用が他教科と共通して行われているのと比較し、国語科の独自性がみられるものであった。

しかしながら、国語科教育におけるメディア教育研究の本質について、中村敦雄は次のように主張している。

メディア・リテラシーを特徴づける汎メディア観に立つと、さまざまな情報の中核は言葉であり、映像にしても言語化・映像化の過程で言葉が介在していることが明白にな

る。つまり、国語科に新たにメディア・リテラシーを加えるという発想でとらえず、国語科そのものをとらえ直す観点として見るのである。こうした観点からすると、(中略：引用者) 日常的な言語生活との関わりから国語科教育を再構築する場合に問題解決の糸口になり得よう。

中村敦雄 (2009) 「メディア・リテラシー」 田近洵一・井上尚美【編】『国語教育指導用語辞典 [第4版]』教育出版231頁

中村は、メディア教育研究の本質について、理想となる既存の国語科の枠に収まる妥当なメディアを選出し、列挙するような作業だけではないことを示している。むしろ、メディアを「国語科そのものをとらえ直す観点として」捉え、「日常的な言語生活との関わりから国語科教育を再構築する」ことが課題となるということである。

1. メディアという概念とメディア的視点

では、「国語科そのものをとらえ直す観点として見る」とは、どういうことか。

一般的に、「メディア (media)」とは、「中位」や「中間」ないし「情報伝達媒体 (media)」という意味を表すということはよく知られている。

しかしながら、そのような「中位」や「中間」を個々のポイントとして捉える位置づけについて、今井康雄は、「ようやく水面上に顔を出すことのできる氷山の一角にすぎない。(今井康雄 (2004) 『メディアの教育学』東京大学出版社38頁)」と指摘している。そしてこのことをふまえ、メディア教育研究として担う課題を「われわれはむしろ屈折した事態をありのままに見ることのできる視界を教育実践のために奪い返すのだと、そう言うべきではないだろうか。(今井 (2004) 前掲書38頁)」と訴えている。

このことを、吉見俊哉は「認識の地平」という比喻を用いながら、詳しく説明している。

私たちが、映画を論じ、テレビを論じ、雑誌や新聞を論じるとき、そのようにして論じているメディア領域を所与の前提とすることはできません。むしろ、映画なりテレビなりを論じるならば、そもそもそうした「映画」や「テレビ」として構成されるメディアの場とは何なのかを、つまりそれぞれのカテゴリーを成立させる場としてのメディアに問いを投げ返していかざるをえないのです。メディア研究とは、このようにして諸分野を越境していく視座から照らし出されていく認識の地平です。私たちは、最初からいくつものメディアが独立してあり、それを括る集合としてメディア全体を考えるというかたちではなく、むしろ逆に、社会的実践が交差する諸々の場で、それぞれのカテゴリーやその実践、制度、装置がどのように創出されてきたのかを考えなければなりません。

吉見俊哉 (2004) 『メディア文化論』有斐閣アルマ4-5頁

吉見は、メディアとは、「独立」した存在ではなく、「諸分野を越境し」「交差する」「地

平」であることを指摘している。そのうえで、メディア研究が、「諸分野を越境していく視座から照らし出されていく認識の地平」であるべきであると主張している。

このように捉えていくと、国語教育もまた「地平」に埋め込まれたメディアの一部分であり、「日常的な言語生活」とすると、まさに「諸分野を越境して」点在するものであるといえる。

そこで本稿では、そのような国語教育をメディア的視点から捉え直し、教科を超えた国語教育観を位置づけていく基礎作業として、国語教育思想に関する検討をおこなう。このことにより、これまで国語教育として捉えられていなかった問題も、国語教育の問題として捉える必要性を示すことができると考えられる。

2. メディア的視点から捉えた国語教育思想

では、メディア的視点となる「認識の地平」からみられる国語教育はどのような様相なのか。

冒頭で挙げたように、今井康雄は、メディア的視点から捉えられる「国語」の姿について、西尾・時枝論争から描出した「国語」観を示し、具体的に次のように説明している。

言語において「主体」が透明になり、言語が人間形成のメディアになるとは、時枝の場合このような事態だったのであろう。ここでも問題は西尾の場合と同様、私に対する自己の透明な関係である。言語能力の訓練によってこのような関係が実現されれば、「思想的内容」は、対象化するまでもなく、透明なメディアとなった言語を介して個々の中に注ぎ込まれる。

今井康雄（2004）『メディアの教育学』東京大学出版会234頁

われわれは、西尾・時枝論争を支えていた―したがっておそらくは戦後の国語教育論の枠組みともなってきた―共通の基盤のごときものをほぼ確認しえた。それは、私に対する自己の透明性と私に対する「思想的内容」の透明性とが同時に可能になる特権的なメディアとして「国語」を想定する国語観であり、そのような「国語」というメディアにおいてこそ「主体」が形成されるとする確信である。こうした「国語」理解はごく穏当で自明にさえ見えるかもしれない。それは、本章で確認してきたようなねじれや改竄や不満の表明を作動させることを通して、その種の表面的現象の背後でますます確固たる自明性を獲得していった。しかし、この自明性は最初から疑わしいものであったし、今やその疑わしさが日々実感されつつあるのではないか。

今井康雄（2004）『メディアの教育学』東京大学出版会237頁

今井は、メディア的視点から捉えられる「国語」について、「言語」という「特権的な」「透明なメディア」によって「私に対する自己の透明性と私に対する「思想的内容」の透明性とが同時に可能になる」「確固たる自明性を獲得していった」「人間形成のメディア」

であると示している。つまり、メディア的視点で捉えることにより、「ごく穏当で自明にさえ見える」「国語」の「その疑わしさが日々実感されつつある」という実態がみえてくるということである。

このような、一見「透明なメディア」という存在でありながら、その「自明性」が問われはじめている「国語」の「思想的内容」について、府川源一郎は次のように述べている。

ことばは、すぐれて言語共同集団のアイデンティティーを作り上げてきた一見無色透明に思えることばそのものの制度性に目を向けなければならないし、それを遂行してきた国語教育の役割を問わなければならない。
府川源一郎（2002）「国語教育思想論の展開」『国語科教育研究の成果と展望』明治図書48頁

今井と同様に、府川も、「ことばそのもの」を取り巻く「言語共同集団」は、「一見無色透明に思える」と述べている。そしてさらに、それらを捉えていくために、「ことばそのものの制度性」と「国語教育の役割」を明らかにしていくことの必要性を示している。

この点については、府川によってすでに詳しく検討され、「国語教育思想の展開」として整理されている。

①「国語」は国民国家を作り出した

国語とは、「国」の「語＝ことば」である。とするなら、まず、ことばにおける国家＝ナショナリズムの問題を考えないわけにはいかない。それは、民衆のことばとしての日本語であり、「民族」のことばとしての日本語の問題である。同時にそれは、日本のアイデンティティーを作り上げている文化の問題であり、また、国家語という位置に置かれたことばの政治性と権力性の問題でもある。

②「文学」も国民国家を作り出した

文学はその言語集団のアイデンティティーを直接に、しかも目に見える形で作り出す。口承文芸を含めて、広い意味での文学を持たない民族はない。人々が集う共通の場で共有するひとまとまりの話（物語＝文学）ということばの形式は、人々の裡に共通の心性を作り出してきた。神話や伝承は、それを教授する人々を結びつける。日常生活に役立つ情報伝達の言語だけでは、民族としての共同幻想を醸し出すことはできないのである。

③国語教育と日本語教育

国籍と言語とは、別の範疇の概念であるはずだ。子どもたちは当面、日本語ということばを教えてもらえばいいのであって、何から何まで日本に同化しようとしているわけではない。いや、本当に「同化」させることができるのか、そのことに意味があるのか、ここに問題の核心がある。それは母語を日本語とする子どもたちにとっても、まったく

同じ質の問題として降りかかってくる。よく言われる日本の教育の画一主義、同質主義、非個性主義などの問題は、こうした地平から切り開いていかないかぎり打開することはできないだろう。この意味で、「国語」教育の問題は、同時に「日本語」教育の問題であり、「日本語」教育の問題は「国語」教育の問題でもある。

④その他検討されるべき国語教育思想

- 1, 戦前と戦後の国語教育指導の断絶と連続
- 2, 宗教・イデオロギーと教育
- 3, 「言語生活主義」の思想
- 4, 言語技術の思想

「府川源一郎（2002）国語教育思想論の展開」『国語科教育研究の成果と展望』明治図書 47-54頁

府川のまとめによると、国語観を形成している国語教育思想は、これまで検討されてきた国民国家形成のための国語教育思想、現在検討されている多言語・多文化を視野に入れた国語教育思想、今後さらに検討の必要が期待されている国語教育思想、が明らかにされている。

ここからは、府川が示しているように、「日本語」「文化」「政治」にまつわる「国家」という「ことばそのものの制度性」と、「日本のアイデンティティーを作り上げている」「日本語」・「国語」の教育の問題でもある「国語教育の役割」とが明らかになっており、これらの検討により、「一見無色透明に思える」国語思想形成に関与した「自明性」の姿が浮き彫りになっている。

3. 日常的な言語生活のなかの国語教育思想

ただし、ここまで、メディア的視点から、国語教育思想の概観を検討してきた気になったことがある。先述した中村の引用に示されていたように、メディア教育研究には、メディアを「国語科そのものをとらえ直す観点として」捉え、「日常的な言語生活との関わりから国語科教育を再構築する」という本質的課題がある。このように捉えると、「科」を越えた子どもの言語生活環境においては、それぞれのコミュニティにみられる価値観や考え方が、子どもの人間形成・国語観の形成に影響を与えるのではないのか、ということが考えられる。

そこで、ここからは、国語科という教科を超えた広義の国語教育思想に関して捉え、メディア的視点から国語教育思想を検討してみたい。たとえば、コミュニティの価値観や考え方の差異が把握しやすい、近世の教育論を例に挙げてみる。

①農工商の子ども

農工商の子には、習字と算数と家業とを教えよ

農工商の子には、幼き時より、只、物かき・算数をのみ教えて、其家業を専にしらしむべし。必ず楽府淫楽、其外、いたづらなる、無用の雑芸をしらしむべからず。これにふけり、おぼれて、家業をつとめずして、財をうしなひ、家を亡せしもの、世に其ためし多し。富人の子は、立居ふるまひ、飲食の礼などをば、習ふべし。必ず戒めて、無頼放逸にして、酒色淫楽をこのむ悪友に、交はらしむべからず。是にまじはれば、必ず身の行悪しく、不孝になり、財をうしなひ、家をやぶる。甚だおそるべし。

貝原益軒（1710）『和俗童子訓』

農家の子どもは「いろは」から始めて、日常の手紙や帳面・契約書のたぐいにしょっちゅう使われる単語及び文句を手習い、そろばんの技能に習熟し、また御触書・ご高札・五人組帳前書など、お上（政治権力者）の出す法令のたぐいの内容を呑みこんで実践できる能力を身につけ、最後はこの『農民竈建往来』の学習をもってしめくくるとよい。そしてこれ以上の勉強たとえば儒教の古典について学ぶことなどは、農民の子どもにとって不必要なばかりでなく、有害でさえある。農民の労働や生活とはまったくかわりのないものであり、子どもに、現状を不満に思い家業をいやしみ、できもしない立身出世の夢を抱かせることになるからだ。

波岡務（1859）『農民竈建往来』〔再録：石川松太郎（1977）『日本子供の歴史3』第一法規23頁〕

近世の記録をみると、家業が「農工商の子」、とくに「農民」の子どもは、「家業を専にしらしむ」ため、「物かき」、「日常の手紙や帳面・契約書のたぐいにしょっちゅう使われる単語及び文句を手習い」、「御触書・ご高札・五人組帳前書など、お上（政治権力者）の出す法令のたぐいの内容を呑みこんで実践できる能力」というものが必要なりテラシーとされている。

注目すべきは、「無用の雑芸をしらしむべからず」、「これ以上の勉強たとえば儒教の古典について学ぶことなどは、農民の子どもにとって不必要なばかりでなく、有害でさえある。」という点である。「農工商の子」に求められていた国語のリテラシーは、「手紙や帳面・契約書」を書くための能力と、「法令」を読むための能力であるが、「儒教の古典について学ぶ」ような能力は不必要であるとされているのである。

ここから、「農工商の子」という家業によるコミュニティのなかで、必要なりテラシーが選択されていることがわかる。

②武家の子ども

我幼き比に、上野物語といふ草紙ありけり。これは、寛永寺の花見る人のむれ来る事共をしるせし也。我三歳なりし春の比にやあるべき、火踏に足をさして、はらばひ居て、その草紙を見ながら、筆紙をもとめて、すきうつしけるを、母にておはせし人の見給ひ、十が中十二はまことの文字もあるを、我父に見せまいらせしを、父のともなる人の来り

見しより、人々も聞伝て、そのうつせしものを取り伝ふることになりたり。
 明けの年の秋、また国にゆき給ひしあとにて、課をたてられて、「日のうちには、行・草の字三千、夜に入りて、一千字を限りてかき出すべし」と命ぜられたり。冬に至りぬれば、日短じかくなりて、課いまだみたざるに、日暮んとする事たびたびにて、西向なる竹縁のある上に机をもち出て、書終りぬる事もありき。また夜に入りて手習ふに、睡の催して堪がたきに、我につけられしものとひそかにはかりて、水二桶づゝ、かの竹縁に汲おかせて、いたくねぶりの催しぬれば、衣ぬぎすてて、まづ一桶の水をかゝりて、衣うちきて習ふに、初ひやゝかなるに目さむる心地すれど、しばし程経ぬれば、身あたゝかになりて、またまたねぶくなりぬれば、又水をかゝる事さきの事のごとくす。二たび水をかゝりぬるほどには、大やうは課をもみてたりき。これ、我九歳の秋・冬の間の事也。

新井白石（1716）「折たく柴の記」〔再録：小高敏郎編（1964）『新古典文学体系95』岩波書店184－186頁〕

新井白石の自伝によると、武家で育った家庭では、3歳にして、すでに、子どもの生活環境に書物が置かれていることがわかる。9歳の記録をみると、むしろ、「課をたてられて」学習する習慣のようなものになっている。ここからは、武家の子どもには、常に学問が身近に存在し、日常的な読み書き以外のリテラシーが求められていたことがわかる。

このように、「農工商の子ども」と「武家の子ども」との教育観を比較してみると、当然、それぞれの職業、身分、階級、年齢によって求められているリテラシーは異なっている。そのため、各生活環境によって、教育目標が明確で、かなり選択された環境整備がなされている。

ただし、重要なことは、近世において子どもに与えられている価値観や考え方は、国民国家として必要なリテラシーの習得ということだけでなく、各コミュニティによって身に付けるべき国語観があり、必ずしも公的な国語観だけが重視されているというわけではないようである。このような公的に捉えられる日本語理解のための国語観と、各コミュニティによって捉えられる生活に必要な国語観の二重性は、国民国家としてまったく同等の国語観を共有しているわけではない人間形成に影響を与えていると考えられる。この点は注目せずにはいられない。

4. メディア的視点から捉える国語教育思想の課題

このような近世の例では、それぞれの職業、身分、階級、年齢によってリテラシーの養成方法が細分化されているため、生活に必要な国語観の姿が捉えやすい。

しかし、もしかすると、このような生活コミュニティの違いにおける国語観の差異は極端な話で、現在では、柔和されつつあるかもしれないとも思える。このことを、現代のコミュニティに置き換えた場合については、次のような指摘もある。

戦後の日本では、個人化、価値観の多様化、核家族化、都市部への人口流入が進み、それに従って、村社会が徐々に廃れていきました。

しかしここきて、ケータイの普及をきっかけに、携帯メールやSNSやプロフを媒介に、色をうかがい、「読空術」により協調性を保たねばならないという、かつて日本にあった村社会のような状況が復活したのです。

しかも、この新しい村社会は、かつての村社会のように拘束力があるうえに、かつての村社会よりも人的規模が圧倒的に大きくなっています。

原田曜平 (2010)『近頃の若者はなぜダメなのか 携帯世代と「新村社会」』光文社新書 93頁

原田は、「かつて日本にあった村社会のような状況」が、「新しい村社会」の問題として起っていることを指摘している。それぞれのコミュニティで見られる価値観や考え方の「拘束力」が「携帯メールやSNSやプロフを媒介」することにより、形を変えて大きくなっているというのである。そうであるとするならば、このように述べてきたような、子どもの人間形成に影響を与える、公的に捉えられる日本語理解のための国語観と、各コミュニティによって捉えられる生活に必要な国語観の二重性は、子どもたちの生活環境においてむしろよりリアルに見られるようになってきているのかもしれない。

しかしながら、このことをメディア的視点で捉えることにより、逆に意識的に生活環境の整備にあたる可能性があることを水越伸はメディアの生態系として、「メディア・ビオトープ」と位置づけている。

僕は日本のメディアの生態系が杉の巨木におおわれており、しかもその管理が行き届かないなかでさまざまな弊害が生まれているといった。これらの巨木はあまりに生い茂りすぎていて、地方まで光が届かず、灌木や下草のような小さなメディアが育たない。しかもたちが悪いことに、多くの杉は戦後植えられたものか、せいぜいが明治国家が確立した後に植えられた程度の歴史しか持たないにもかかわらず、この国に住む人々はまるで何百年も前から「自然に」生えていたかのように思い込んでしまっている。今さら自分たちをおおっているドームの主演、メディアのあり方を変えることなどできるはずもない。そういう思いが日本社会には蔓延しており、なおさら灌木や下草に元気がない。

そんなメディアの生態系をマスメディアのみが卓越した状態から、大きなメディアから小さなメディアまで、さまざまな主体が多様に展開できる状態へと遷移させていく。マスメディアをただ批判するのではなく、メディアの多様性を回復するなかで、豊かなメディアの生態系を生み出していこうとする。そうした営みを、メディア・ビオトープとしてとらえてみようというのである。

水越伸 (2005)『メディア・ビオトープ メディアの生態系をデザインする』紀伊国屋書店80頁

水越は、メディアの生態系として、日本のメディア環境を「メディア・ビオトープ」のようにとらえ、整備していく必要性を示している。

子どもの国語観を形成していく生活環境は、「大きなメディアから小さなメディアまで、さまざまな主体が多様に展開できる状態へと遷移させていく」ことが想定される。今後は、このような生態系を具体的に分析しながら、多くの子どもたちを取り巻く言語生活コミュニティがいかに有効的に共有し、理解していけるか、検討していくことが課題となる。

今後は、こうした課題をコミュニティごとに整理し、国語科という教科を越えた子どもの言語生活環境においては、それぞれのコミュニティにみられる価値観や考え方が、子どもの人間形成・国語観の形成に影響を与えるのではないのか、という観点から追究する必要がある。

注

- 1 稿者は「国語科メディア教育」史を、「視覚教育期・聴覚教育期」（国語科教育において「視覚教育」「聴覚教育」による試論・議論が活発に行われた時期1930年-1950年）、「視聴覚教育期」（「視覚」と「聴覚」とを重ねた概念が登場し、教育観が拡張した時期1950年-1970年）、「視聴覚メディア教育期」（電子メディアも加わりながら、メディア教育の教育観が定着してきた時期1971年-1990年）、「メディア・リテラシー教育期」（メディアを教材としてだけでなく、テキストとして捉える教育観が登場した時期1991-）という枠組みで捉えてきた。
- 2 諸葛信澄（1873）『小学教師必携』〔再録：文部省編『明治・大正教師論文集成1』ゆまに書房〕
- 3 有働玲子（2009）「話し言葉教育の実践に関する研究」『学位論文』兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科に、史的位置づけがなされている。
- 4 中村敦雄が「国語科教育は、伝統的にリテラシー（読み書き能力）育成を自らの任務としてきた。（中略：引用者）メディア・リテラシーという新たなリテラシーは範囲を言語からメディア一般へ拡張し、批判的な理解を強調したところに特徴がある。」と「国語科メディア教育」を「伝統てき」な系譜から導き出している。「メディア・リテラシー」田近洵一・井上尚美【編】（2009）『国語教育指導用語辞典〔第4版〕』教育出版230頁
- 5 このように捉えられるようになった背景を『ランダムハウス英和大辞典』（小学館、1994）では、単数形の「medium」が、やがて「中間的手段（intermediate means）」、「経路（channel）」といった伝達手段の意味が加わり、複数形の「メディア（media）」になったとしている。これにより、「情報伝達媒体（media）」として捉えるメディア、その伝達の場にあたる「媒質（medium）」としてメディアという捉え方が生まれた、と裏づけている（1994）小学館

Some Considerations on History of Educational Thought about Language Arts in Japan: From the viewpoint of media education

TAKIGUCHI Mie

Hiroshima Cosmopolitan University Faculty of Childhood Education

Abstract

How did Japanese people develop the language ideas which has some influences to children's comprehension and expression? In the early modern period in Japan, any values and thoughts which backed up such language ideas were varied according to their parents' vocation, class, age and which communities and life environments they belong. Then, how do language life environment and education in their community engage in developing children and their language ideas? Or, how each values and thoughts elucidated by each community and life environment develop children's language ideas? In this paper, discussing early modern Japanese educational thoughts, something is clarified as follow. 1) the language idea vary according to children's belonging community, 2) There would be important educational thoughts that has any critical influence on developments of children's language ideas

Key words: Media Literacy education, History of Educational Ideas, History, Understanding and Expression.